

が  
あ  
ち  
ゃ  
ん  
の

# ヨット大冒険

大平幸子



講談社

# あちゃんの ヨット大冒険

大平幸子



かあちゃんのヨット大冒険

定価 890 円

昭和53年10月24日 第1刷発行

著 者 大 平 幸 子

発行者 野 間 省 一

発行所 株式会社講談社



東京都文京区音羽 2-12-21 郵便番号 112

電話／東京(03)945・1111 振替／東京8-3930

印刷所 慶昌堂印刷株式会社

製本所 株式会社堅省堂

© Sachiko Ohira/1978, Printed in Japan

落丁本・乱丁本はおとりかえします

0095-435738-2253(0) (学2)

# 目 次

序章 わが中年に悔なし……………11

“人生のすばらしさ”を実感する 11

夫、雄さんの夢 13

三人の男が仲間に 17

夫婦で荒浪にもまれてこそ 20

航海日記

第一章 声援に送られて……………27

進路百二十五度——出航 27

早くも大時化に突入 35

父島に住みつきたい 43

第二章 マリアナ諸島に行く……………52

大海原とスクールと満天の星と 52

親切なサイパンのみなさん 63  
世界一周もお金が必要ば…… 69

### 第三章 赤道直下の猛暑に耐えて……………77

雄さんの仕事が多過ぎる 77  
人魚の住みそうなボナベの海 81  
お酒飲むにはドリンクバスポートが必要 86  
アメルバ赤痢に悩む 90  
なんでこんな苦勞を買ったのか 96  
クサイ島からナウル島へ 99  
飲み助たちの赤道祭 103

### 第四章 「さちかぜ」浸水す……………110

カツオが釣れた！ 110  
末っ子クルーたち 113  
なぜかトラブル続出 116  
エリスのフナフチ島入港 118

第五章 南海の樂園に遊ぶ……………126

傷だらけで一路フィジーへ 126

金がなくても楽しいフィジー 129

十三日の船出は禁物 136

天国に近い島は物価高だった 140

シイラの刺身で乾杯 145

第六章 半年間シドニーで再起をはかる……………150

藤本君が船を降りた 150

夫婦でスキヤキハウスに就職 155

淋しいクリスマスと正月 159

藤本、名本両君との別れ 162

“ベンチ”が泳げた！ 164

思い出深いシドニー最後の夜 166

第七章 三人クルーで再出発……………171

グレート・バリア・リーフを行く 171

二度とヨットに乗るものか！ 176

白豪主義まかり通るタウンズビル 180

ケインズから木曜島へ 184

カモメとイルカと横波と 190

インド洋に向けて艇を補修 194

第八章 インド洋の荒波を乗り切る……………198

ヨットマンのオアシス、クリスマス島 198

二十メートルの荒波また荒波 205

毎月二、三隻の漁船が遭難 213

ダーバンで嵐の過ぎるのを待つ 216

やつのことでポートエリザベスへ 219

メインセールが真つ二つ！ 223

ケープタウン入港 228

第九章 大西洋ぶらり旅……………231

順風満帆、セントヘレナへ……………231

ゆらりゆらりとブラジルへ……………235

貴重品が盗まれた！……………241

ドラム罐たいてカーニバル……………245

第十章 ハワイに進路をとれ……………249

星条旗かかげてパナマ運河を……………249

のろのろ帆走でアカプルコへ……………254

アカプルコからハワイへの寒い旅……………257

日本に帰ったようなヒロ、ホノルル……………264

第十一章 最後の旅、三千五百マイル……………269

風さん、吹いとくれエー……………269

出航以来の鈍航記録が出た 277

危機一髪、最後の大試練 279

父島はまだか…… 286

終章 「さちかぜ」に乾杯……………289

二年ぶりに畳に寝る 289

九州の灯が見えた 293

八百十三日ぶり、小倉に帰港 300

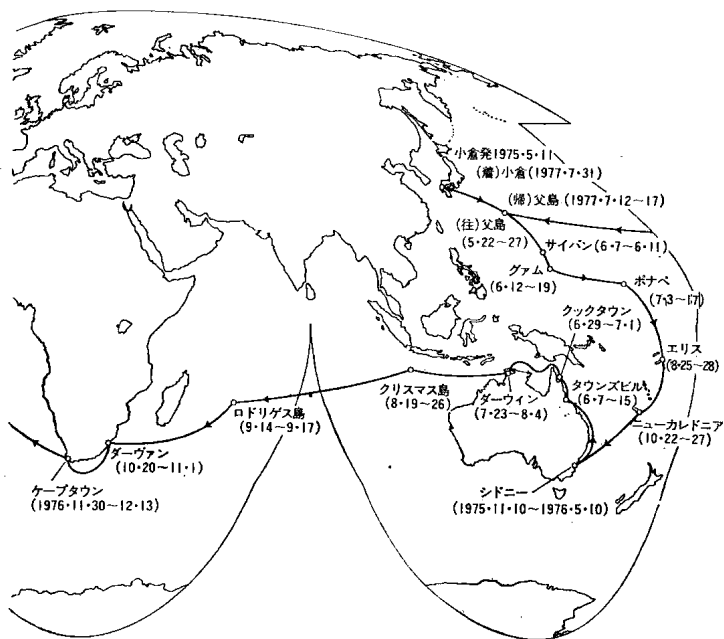
あとがき……………303

装幀・鈴木邦治

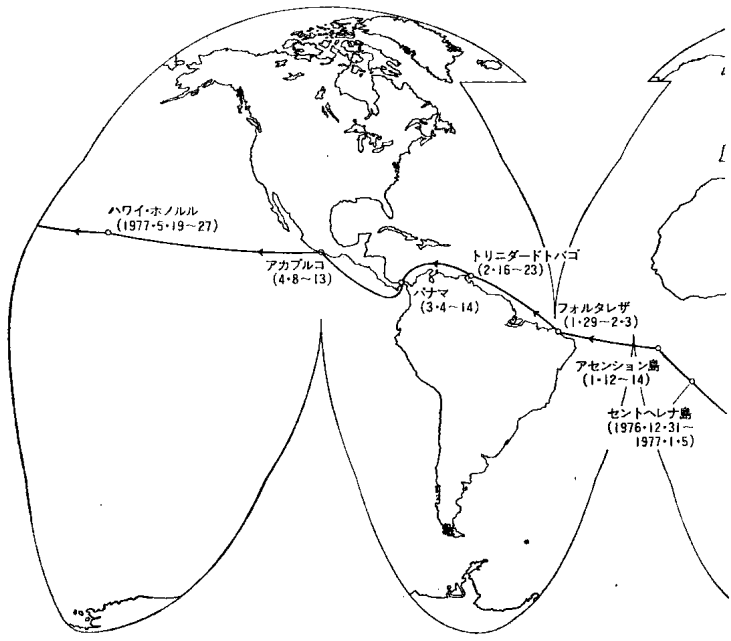
装画・日暮修一

本文イラスト・河原崎弘司

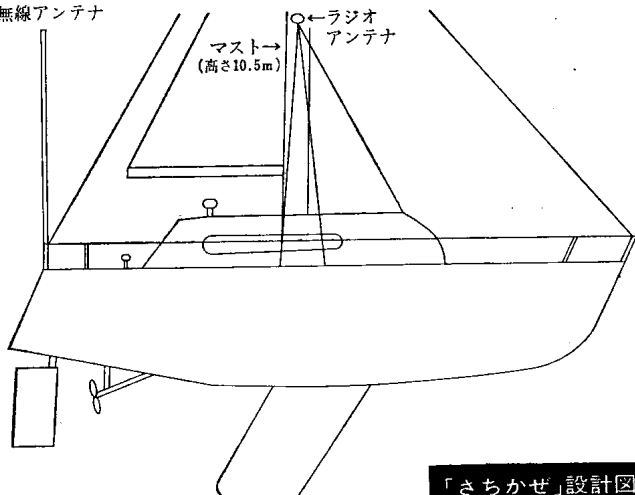
の世界一周航路



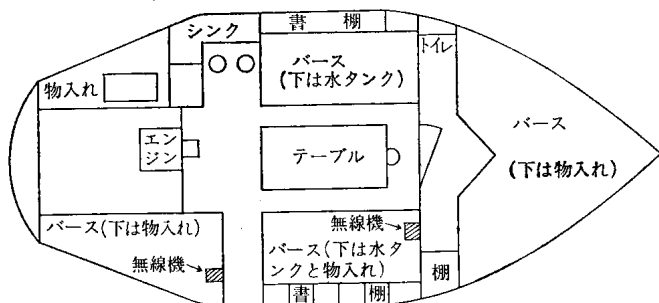
「さちかぜ」号



無線アンテナ



「さちかぜ」設計図



●主要諸元

全 長 8.4m  
水 線 長 6.9m  
巾 2.81m  
吃 水 1.41m  
重 量 3,000kg  
バラスト 1,300kg

帆 面 積  
メインセイル 14.05m<sup>2</sup>  
ジ ャブ 1 27.30m<sup>2</sup>  
レギュラージブ 13.61m<sup>2</sup>  
ストームジブ 6.75m<sup>2</sup>

エンジン ヤンマー YS-8  
(3. HP ジーゼルエンジン)

構 造 艇体=木造・ストリッププランキング  
デッキ=マホガニー・タイニール加工

(設計者 Van de Stadt)

## 序章 わが中年に悔いなし

——ヨット世界一周旅行の実現まで

“人生のすばらしさ”を実感する

長い旅を終えたあとに、十一冊の航海日誌が残りました。ところどころ波しづきがかかり、インクのにじんだノート。なんのへんてつもない古ぼけたノートの束ですが、いま私にとってはかけがえのないものです。

“冒険”という呼び方がふさわしいかどうかは、わかりません。とにかく、そう若くもない女の身で、ヨットで世界を一周するという大それたことをやりとげた、その八百十三日間のよろこびと苦しみのすべてがここにあるのです。

昭和五十年五月十一日に北九州市小倉<sup>こくら</sup>を出航した「さちかぜ」は、まず太平洋を南下してオーストラリア大陸へ向かい、それからインド洋を越え、アフリカの南端を通じて大西洋に入り、さらに

ブラジルからパナマ運河を経て太平洋に出るといふ、いわゆる西周りコースをたどって、全コース三万七千マイルを走破し、五十二年七月三十一日に再び小倉の砂津港に帰りついたのでした。

こう書けば簡単なようですが、もちろんその航海は平穩な日ばかりではありませんでした。恐ろしさのあまり眠れない夜もありましたし、正直いって、「もうダメか!」と思ったことも何度かありました。死に直面するような事故に遭ったあとでは、航海に出たことが悔やまれて、途中で引き返そうと真剣に考えたものでした。それでもなぜか、私たちの旅はつづきました。

いま靜かに航海日誌を読み返していますと、それまで日本を一步も出たことのない私が、よくもまあ、あんな途方もない大自然の中をただよってこられたものと、あきれる思いです。そしてまた、英語はサンキューぐらいしか知らなかった四十半ば過ぎのおばちゃん、よくもまあ世界の港でいろいろな人たちと話をかわしてきたものと、われながら感心してしまうのです。

じつは、最初のうちは必ずしもこのヨット旅行に乗り気ではなかった私ですが、いまは、行つてきて本当によかったと思っています。それは、ただ単に大きな経験、あるいは珍しい体験をしたというだけでなく、人間にはこんな生き方もあるのかということ、身をもって知ったからです。日常生活のくり返しの中から得られない「人生のすばらしさ」の実感といつてもよいでしょうか。

ですから、いま、私たち夫婦はなにかも持てるものを失つて、ゼロから新しく人生をやり直すうとしていますが、もちろん悔いる気持などこれっぽっちもありません。

## 夫、雄さんの夢

「ヨット世界一周」は、夫の雄さん（正しくは雄三ですが、私はいつも「雄さん」と呼んでいるので、ここでもそのように書くことにします）の胸に、ここ十数年来あたためられ、育はぐまれてきた、いわば長年の悲願でした。

その計画が実現するまでの経過を説明するには、まず私たち夫婦の出会いから述べたほうがよいでしょう。

そもそも私が雄さんと知り合ったのは、いまから十八年前の昭和三十五年ごろのことです。そのころ二人は小倉のあるタクシー会社で働いていました。雄さんは運転手、私は無線係でした。

初めのうちは、無線連絡の際に軽い冗談を交わしたり、仕事のあとお茶を飲みに行ったり、といった付き合いにすぎませんでした。それは、私のほうが八つも歳上で、雄さんに対して「姉さん」のような感情しか持っていなかったからです。

それが「お姉さん」からそれ以上の間柄になったのは、たしか病気で入院した雄さんを見舞に行って、何かと身の回りの世話をしたことがあってからです。

退院後、雄さんから交際を申しこまれ、それから私たちは急速に親しくなりました。休みの日にはよく関門海峡や平尾台など、北九州のデートコースをドライブしたものです。

やがて、雄さんは一人住まいの私のアパートにときどき遊びに来るようになりました。当時、親

元を離れて会社の寮にいた彼は、私の手料理をいつもきれいにたいらげて、至極ご満悦でした。

そんな付き合いが半年ほどつづいたある日、プロポーズを受けました。が、どう答えたものか、私は大いに迷い悩みました。もちろん雄さんの人柄は信頼し、すでに愛していただのですが、なんといってもそのとき彼は二十半ば、それに対して私はすでに三十すぎ、この年齢のことがまずひっかかって、素直な返事をためらわせたのです。それに相手方の両親をはじめ周囲も猛反対であり、そうした困難な条件を押し切ってまで結婚に踏みきる勇氣は、私にはとてもありませんでした。

ところが、雄さんのほうは真剣でした。

「オレは、一度こうと決めたら、どんな反対があってもやりとげてみせる」

と、さっさと私のアパートに引っ越してきたのです。私には、いやもおうもありませんでした。

こうして、結婚式も披露宴もない、だからの祝福も受けることのない、二人の生活が始まりました。昭和三十八年の二月のことです。

「オレたちが一生懸命働けば、いつかは必ず一緒になってよかったと思う日が来るよ」

雄さんに励まされ、引っぱられ、私は親たちにも認めてもらえない辛さをこらえて働きました。

そして、その年の十二月、小倉の街で、ささやかながら食堂を開いたのです。店の名前は「大平食堂」といって、ごく大衆的な、そう広くもないお店でしたが、近所に勤めるサラリーマンの溜り場として、けっこうはまりました。

それからまもなく、相手方の両親も私たちの間を認めてくれ、戸籍上もようやく天下晴れて夫婦となりました。私たちが周囲の猛反対のなかを押しつぶされることなく結婚生活をつづけてこられ